
壁

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

壁

【Nコード】

N7656D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

冷戦の頃。東ベルリンから西ベルリンに仕事で入ったエヴァゼリオンはそこでヴォルフガングという若者と出会う。二人は惹かれ合うがその間にはベルリンの壁が。冷戦時代のドイツでのお話です。

第一章

壁

壁がなければ。二人はどれだけそのことを思ったか。

西ベルリンと東ベルリン、ドイツの首都だったベルリンは二つに分断されていた。それはそのまま祖国の姿でもあった。それが当時のドイツであった。

そのベルリンを分断しているのが壁であった。ベルリンの壁。それがそのまま二人を分けていたのであった。

二人が出会ったきっかけは仕事であった。エヴァゼリン・ブラウリッターが仕事で西ベルリンに入った。彼女は東ベルリンで事務員をしていた。時々仕事で西に出入りしていたのだ。それでその時もそうであった。

だから最初は何も思うところはなかった。西ベルリンは華やかなのは確かだが落ち着かないと思っていた。時々その華やかさが羨ましくなるがそれでも今いる東ベルリンののどかさが好きだった。それはイデオロギーではなく彼女の嗜好であった。しかし嗜好というものの変わるものでこの時の彼女がそうであった。

「ねえ君」

西ベルリンを歩いていると声が聴こえてきた。若い男の声だった。

「ねえ君って」

「!？」

その声におかしなものを感じた。それで辺りを見回すと癖のある蜂蜜色の髪に灰色の目をした背の高い若者がいた。洒落たジャンパーにジーンズを着こなしている。その明るい顔立ちと格好から彼が西側の人間だとわかる。

「何処に行くの？」

「帰るだけですけれど」

仕事が終わったのでこう答えるだけであった。エヴァゼリンにと

壁

つてみればただ仕事でこの街に来ただけである。それも終わったの
で後は帰るだけであつたのだ。

「それが何か」

「時間あるかな」

「時間!？」

「そつだよ。暇?」

彼はエヴァゼリンに時間を尋ねてきている。彼女は最初そう思っ
た。

「時間でしたら今は」

古い腕時計を見る。黒い古びたものでもう何年も使っている。東
ドイツではそれが普通だつた。見ればエヴァゼリンの格好も黒く長
いロングヘアに黒い目。奇麗だが釣り上がった東洋人を思わせる切
れ長の目である。鼻が高く卵に似た形の顔をしている。肌は程よく
白い。長身でスラリとした身体もありはつきりとした美人である。
だがその服装も化粧も街中ではかなり地味だつた。野暮つたいスカ
ートが少し長い黒っぽい事務服を着ていて化粧も薄い。今日の前
にいる彼の方がずっと華やかな格好をしている程であつた。

「時間なら僕がわかつてるよ」

「それでしたら何故」

「だからさ。時間があるっていうのはね」

彼は笑つてエヴァゼリンに言うのだった。

「どう、デートでも」

「デート!？」

「それが嫌だつたら一緒に喫茶店でも」

「お茶を飲むのですか」

「駄目かな」

「いえ」

それを断らなかつたのは運命か。断つてもよかつたのだが丁度喉
が渴いていた。それで普通に受けたのであつた。仕事の中で休んで
お茶でも飲む感覚だつた。彼女は実は紅茶派である。ドイツでは珍

しいと言われている。

「コーヒーじゃないんだね」

彼もそれを言ってきた。東側にはないモダンと言うべきかアメリカナイズドと言うべきかエヴァゼリンから見れば無意味なまでに派手な店の中で彼は言うのだ。白いテーブルに向かい合って座っている。彼が飲んでいるのはドイツ人らしくコーヒーであった。

「好きじゃないの」

それが彼女の返事であった。

「コーヒーはね」

「またそれはどうして？」

「こつちじゃコーヒーは普通に飲めるわよね」

「まあね」

彼は何を言っているのかと言わんばかりの素っ気無い調子で答えてきた。

「僕が今飲んでいるみたいだね。ああ、そうか」

「わかってくれたみたいね」

「簡単には手に入らないんだったね」

「そうよ、コーヒー豆がね」

少し無然として彼に答えた。

「あの大豆の。まずいのよ」

「らしいね。僕は飲んだことないけれど」

彼は代用コーヒーの話聞いてエヴァゼリンにまた答えた。

「話には聞いているよ」

「それで紅茶なの。美味しいコーヒーなんてあるのかしら」

「代用コーヒーばかりなんだね、そっちは」

「多いわよ」

少し無然として答える。

「というかそればかりね。美味しくなくて、本当に」

「じゃあ本当のコーヒーは知らないんだ」

彼はそこまで聞いたうえで述べてきた。

「あのコーヒー豆のコーヒーは」
「今は特にないわね」

それは本当のことだった。どういふわけか最近店に行っても品不足が目立つ。それに対してこちら側は見事なものだ。ないものはないと言っている。

「そう。じゃあ僕がその本物のコーヒーを御馳走してあげるよ」
「ここで？」

「だから君を誘ったんだよ」
これは嘘だった。エヴァゼリンもそれはわかる。

「本当かしら」
「疑うの？」

「イタリア人ってね。東側にもよく来るのよ」
ここで彼女は欧州きつての女たらしを出してきた。イタリア人と言えば女たらしであるというのはどうやら東側でも同じようである。だがそれで嫌悪感を受けないのがイタリアの愛嬌であろうか。

「それでいつも女の子を誘うから」
「彼等とは違うよ」

彼は笑ってそれを否定する。

「僕は生粋のドイツ人だよ。そんなことはしないさ」

「じゃあどうして私を誘ったのかしら」

何時の間にか口調が砕けていることには気付いていない。

「美人だからだよ」

彼は笑って言う。

「じゃあイタリア人と同じじゃない」

「だから違うんだって。美人に美味しいコーヒーを御馳走したいんだ」

話を言い繕ってきた。

「そう考えて声をかけたんだよ」

「そう捉えていいのね」

「是非ね」

屈託のない笑顔で述べる。東ベルリンではあまり見ない笑顔であった。

「頼むよ、だからここは」

「ええ。それじゃあ飲ませてもらうわ」

エヴァゼリンもそれを受けた。本音を言つとあまり飲みたくはないのだがそれでもその場の雰囲気ですうした流れになつてしまつたのであつた。

第二章

そうして紅茶を飲んだ後でコーヒーも飲んでみる。店員の笑顔と共に前に置かれたそれは黒大豆のあの代用コーヒーよりも色が濃いが味が変わらないものだと思っていた。

そう思いながらカップを持ってコーヒーを口の中に入れる。すると。

「これって」

「美味しいでしょ」

彼は驚いた顔になったエヴァゼリンに対して微笑んでみせてきた。

「コーヒーは」

「ええ、とても」

驚きを隠せないまま彼に答える。

「コーヒーってこんなに美味しいものだったのね」

「驚いた？」

「西じゃいつもこんなものを飲んでるのね」

「そうだよ」

彼はまた笑顔で答えてきた。

「普通にね。飲んでるけれど」

「そうなの。何か」

「おっと」

ここで彼はエヴァゼリンにそれ以上は言わせなかった。

「そつちのことはおおよそは知ってるから。それ以上は言わない方がいいね」

「え、ええ」

彼の言葉に頷く。東ドイツでは迂闊なことは言えなかったのだ。

東ドイツは東側では共産主義の模範生と言われていた。それはソ連をも凌駕すると言われソ連にとつても最も頼りになるパートナーであったのだ。その政治形態は一説にはナチスを模倣していると言わ

れているがナチスもソ連も同じ全体主義国家であることを考えればこれは当然のことである。

「わかったわ。それじゃあ」

「またこっちに来るかな」

彼は今度はそれをエヴァゼリンに尋ねてきた。

「どうかな、そこは」

「三日後ね」

エヴァゼリンは何となく彼が気に入っていた。その笑顔とコーヒーを御馳走してくれた好意と今の制止のしつかりしたもの。どうやら自分より年下らしいがそれでもよかった。

「三日後またこっちに来るわ」

「そう。だったら待ち合わせしよう」

「何処で？」

「この店の前で」

にこりと笑ってこう提案してきたのだった。

「それでいいかな」

「ええ、いいわよ」

エヴァゼリンもにこりと笑った。そうして彼に答える。

「それじゃあそれでね」

「うん。あと名前だけねど」

「エヴァゼリン、ブラウリッターよ」

彼女は自分の名前を教えた。

「貴方は？」

「ヴォルフガング、アーベンハイト」

彼はそう名乗った。

「これが僕の名前だよ」

「そう、ヴォルフガングっていうの」

不思議と今聞いただけでその名前を覚えることができた。

「わかったわ。じゃあまた三日後ね」

「ここで夕方に待っているからね」

「夕方にね。またコーヒーを飲みましょう」
「うん」

ヴォルフガングはまたにこりと笑って応える。これが二人の出会いでありそれから彼女が東ベルリンに行く度に会ってコーヒーを飲むのだった。会っているうちに二人はお互いのことを知るようになった。

「そう、学生さんなのね」
「年上だったんだ」

その店で向かい合って座って話をしていた。ここでそれがわかったのだ。

「私の方が三つ上だったのね」
「そうだね。まあそうじゃないかなって思ったけれど」
「年上は嫌？」

不意にという感じでこう尋ねた。よく年上が嫌だという男が多いからだ。彼女はそれを警戒したのだ。

「ううん、全然」
だが彼はそうではなかった。首を横に振って微笑んで述べてきた。
「それは全然ないよ」
「そう、よかったわ」
「けれどさ、今の言葉って」
だがヴォルフガングはここで言うのだった。

「何かしら」
「告白ってことだよ」
それに気付いていなかったエヴァゼリンに楽しげに微笑んで言うてきた。

「つまりは」
「あっ」

それを言われて本人も気付く。クールな美貌が赤く染まった。

「そ、そうね」

「そっだよ」

戸惑う彼女にまた言う。

「いいよ、僕は」

「いいのね？」

「だって。エヴァゼリンさんとても綺麗だから」

「もう、早速お世辞なんか言って」

苦笑いを浮かべるが悪い気はしていない。その証拠に顔は赤いままである。

「何も出ないわよ」

「何も出なくていいよ、そんなのいらさないから」

ヴォルフガングはこうエヴァゼリンに言葉を返す。

「エヴァゼリンさんと会えるだけでね」

「それでいいのね」

「それにさ、最近」

ここで話が政治的なものになる。それはこの街にいるならば避けられないことであった。東と西に分けられているこの街ならば。

第三章

「ソ連の態度が柔らかいし。だから」

「実はここに来る回数が増えているのよ」

エヴァゼリンはそれをヴォルフガングに教えるのだった。

「内緒だけれどね」

「じゃあこれから結構会えるね」

「ええ」

笑顔でヴォルフガングに告げるのであった。

「そうよ。けれど今月は今回で終わりなのよ」

「えっ、今月はこれで終わりなんだ」

「また来月何回でも会えるわ。だから楽しみにしていてね」

「わかったよ。けれど」

ヴォルフガングは困った顔になった。思うことは一つであった。

「あの壁さえなければな」

「それについては何も言えないわ」

エヴァゼリンは口をつむいでしまった。東側ではそうした政治的なことは言えないからだ。だから彼女はここでは何も語ろうとしないのであった。

「悪いけれどね」

「わかってるよ。じゃあ聞き流して」

「ええ、わかったわ」

今そうなったばかりの年下の彼氏の言葉に頷く。

「そういうことね」

「うん。まあ今日はこれでいいや」

ヴォルフガングは急に満足してきた。

「エヴァゼリンさんの彼氏になれたしね」

「またご機嫌取りの言葉かしら」

「違うよ、本音」

「イタリア人もそう言うわよ」

またイタリアが出る。実はドイツ人はイタリアが嫌いではない。イタリアもドイツを頼りにしているところがある。意外と相思相愛の関係なのである。なおかつてはこの二国は神聖ローマ帝国であった。

「それもしょっちゅうね」

「西側の方がイタリア人多いせいかな」

ここでヴォルフガングは自分の軽さをイタリア人のせいにしてきた。

「その影響かも知れないね」

「東ドイツでも多いわよ」

エヴァゼリンはこう言葉を返す。

「実際のところ。こんなにいるのにかけている程ね」

「そんなにいるんだ」

「ドイツの女の子はクールビューティーだって言ってるね」

その理由で来るといふのだ。他には。

「ポーランドの女の子は可愛い、ルーマニアの女の子は同じラテンだから、ハンガリーの女の子とは気が合う、ソ連の女の子は優しいって」

「全部勝手に理由つけてるだけじゃないの、それって」

「多分そうね」

それがイタリアだ。二人もわかっているが決して悪い顔はしていない。

「だからあえて何も言わないけれどね」

「僕もその影響かな」

「最初は西側の男の子って全部そうかと思ったわよ
やっとならここでもイデオロギーの話になる。」

「かと思ったら。違うのね」

「人間なんて同じものだよ」

ふと言葉が哲学的なものになった。

「実際のところはね。イタリア人にしろ」

「同じなのね」

「そうだよ、だから余計に思うんだ」

「また言うのだった。今度はその壁がある方を見て。」

「あの壁がなくなつて。同じ人間同士」

「無理ね」

エヴァゼリンは右手にコーヒーを持ってそれを飲みながら応えた。代用コーヒーとは全く違う独特の苦味と旨味が口の中を支配していく。その甘みまでも感じながら。

「あの門が開くことはないし」

「うん」

ブランデンブルグ門だ。かつてはベルリンの栄光の象徴であつたが今では忌まわしい分断の象徴となつている。この門が開かれることは二度とないと言われていた。

「これ以上何を言つてもはじまらないわ。止めましょう」

「そうだね。じゃあまた来月だね」

「ええ、来月ね」

時間が来た。二人は別れることにした。

「いつもの場所だね」

「今度はもっと時間があればいいけれど」

「何とか作つてみるわ」

エヴァゼリンはヴォルフガングの言葉にこう応えた。

「もっとね。お話したいし」

「うん、僕もね。だから」

「わかつたわ」

そんな話を最後にして別れた。それから何度も会い二人の交際は続いた。その中で歴史は少しずつ動いてはいた。だが二人はそれには気付かない。そして二人の関係はその歴史よりさらに進んでいたのであつた。

壁

「これぞ」

就職したヴォルフガングはいつもの喫茶店でエヴァゼリンに何かを差し出した。それは青紫の小さな箱に入っていた。

「それってまさか」

「そのまさかだよ」

いつものおちやらけた様子はない。真剣な顔であった。

「受け取ってくれるかな」

「そうしたいわ」

だがエヴァゼリンは動かない。強張った顔で述べるだけであった。

「けれどそれは」

「駄目なのかな」

「壁があるから」

それが彼女の返答であった。

「だから」

「受け取れないんだ、やっぱり」

「御免なさい」

泣きはしなかった。だが俯いたその顔は沈痛なものであった。声もまたそうなっていた。

「私には。どうしても」

「こつち側には駆け込まないの？」

亡命である。実際に東から西に亡命する人間は後を絶たなかった。自由と豊かさを求めてである。そもそも壁にしるそうした流れを防ぐ為のものだったのだ。エヴァゼリンは特別に仕事上の関係でこちら側を行き来しているだけなのである。しかもそれには誰にも言えない秘密があった。

「私の家族がね」

「そつちの秘密警察にか」

「そついうことなの。だから」

彼等の知らないいつに人質にされているというのだ。全体主義国家ではよくあることだ。

「そちらには行けないわ」

「壁がなかったら皆に行けるんだよね」
「それはね」

こくりと頷いて小さい声で答える。確かに壁がなければそれも不可能ではない。彼女もそれはわかっている。だがそれと共に壁があるのもわかっているのだ。

「けれど。どうしてもそれは」

「全部、それもこれも」

ヴォルフガングは忌々しげに言った。彼もわかっていたのだ。壁のことが。

「あの壁のせいで」

「言っても仕方ないわ」

エヴァゼリンは力なく応えるだけであった。俯いたまま。

「それはもう。それに」

「ここにもいるかも知れないんだ」

「知ってるわよね、私の国のことは」

「今話したしね」

ヴォルフガングの言葉がさらに忌々しげなものを語るようになっていた。

「わかってるよ。こっちではもう散々な評判だよ」

「そうでしょうね、それはわかるわ」

「だから。これ以上言えば君に迷惑がかかるかも知れないね」

「御免なさい」

「謝ることはないよ、君は」

エヴァゼリンを慰めて言うのだった。

「悪いのは。全部」

「このままずっとなのかしら」

エヴァゼリンは言うつと危険が及ぶ可能性があるのをわかっ
ていてあえて言うのだった。心を抑えられなくなっていたからだ。彼女らしくないことであったが。

「私達はずっと」

「いつか変わるよ」
ヴォルフガングはそれを必死に否定して言うのだった。

第四章

「絶対に。こんなことが何時までも続くわけがないさ」

「そうよね」

「きつとそうだよ」

ヴォルフガングは必死にこう主張する。

「だから。その時まで待とうよ、今はいい雰囲気だし」

「そうね。けれどまた」

エヴァゼリンは知っていた。これまでもこうした状況は何度か訪れていた。所謂雪解けである。しかしその後には必ずまた雪が降ってきた。このベルリンにおいても。だから未来に期待することはできなかつたのだ。これまでのことを知っているからこそ。

「そうなたら」

「今度は絶対違うよ」

それでもヴォルフガングは言う。

「今度こそは」

「そうね」

「きつとそうだよ」

希望を見ているかのようにエヴァゼリンに話す。

「それじゃあ賭ける？」

「何を？」

「若しあの壁が壊れて門が開いたら」

「その時は？」

「この指輪を受け取ってよ」

それが賭けであった。今それをエヴァゼリンに言うのだった。

「絶対に。いいね」

「わかったわ」

一応はそれに頷く。信じてはいないが。

「それじゃあその時ね」

「ああ、きつとだよ」

ヴォルフガングは信じていた。エヴァゼリンに比べて楽観的なのかどうかかわからないが彼は確かに信じていた。そしてそれはかなり固いものであった。

「その時。門のところで渡すから」

「ええ、待っているわ」

二人は一応はそう約束し合った。それでもエヴァゼリンはそれを信じる気にはなれなかった。信じたかったがそれを出来るまでにはなれなかったのだ。

だが。ヴォルフガングの願いが適ったのかどうかわからないが時代が動いた。何とベルリンの壁が崩れたのだ。あのブランデンブルグ門も開いた。秘密警察でさえも力をなくし統一が声高に叫ばれた。今エヴァゼリンの前ではベルリン市民達が満面の笑みでその壁を壊していた。

「もうこんな壁はいらないんだ！」

「俺達は自由なんだ！」

「そして一つになるんだ！」

壁が崩れるということはそれに直結する。長い間二つに分かれていた祖国が一つになるうとしている。それこそがドイツ人達の悲願であった。その悲願が果たされようとしていたのだ。

「嘘みたい……」

エヴァゼリンは目の前の光景を見てもまだ信じられなかった。まさか本当にこうなるとは思っていなかった。だがこれは紛れもなく現実のものだったのだ。

「まさか本当にこうなるなんて」

しかし本当のことなのは間違いない。周りの声と目の前の光景がそれを彼女に教えている。それを身ながら呆然としているのだった。しかしここで。開かれた門の向こうから声がした。

「エヴァゼリン！」

彼の声だった。あの約束通りだった。

「いるかい！？僕はここだよ！」

「ヴォルフガング！？」

エヴァゼリンにもその声は聞こえている。それでその声に問うた。
「ヴォルフガングなのね、その声は」

「うん、そうだよ！」

間違いなくヴォルフガングの声だった。その声のエヴァゼリンの耳にはつきりと聞こえた。間違えようのない声だった。

「約束、覚えてるよね！」

「ええ、勿論よ！」

エヴァゼリンは彼の声に応えた。

「じゃあ今からそちらに行くわ！」

「うん、待ってるから！」

またヴォルフガングの声がした。

「ここで！」

「ええ！」

エヴァゼリンはそのまま駆けて行く。門を出たところに彼がいた。彼は満面に笑みを浮かべてその手にあの青紫の箱を持っている。それこそが。

だがエヴァゼリンはそれよりもまず彼を抱き締めた。そうして言うのだった。

「本当なのね、これって」

「だから言ってたじゃない」

ヴォルフガングは自分に抱きついてきたエヴァゼリンを抱き締め返して言うのだった。その手に箱を持ちながら。それは忘れるわけにはいかなかった。

「きつとこなるって」

「信じられなかったわ」

それでも今は信じられた。心から。

「こんなことになるなんて」

「僕は信じていたよ」

ヴォルフガングは笑顔で応える。

「きつところなるって。ドイツが」

「そうなの」

「それでね」

彼女を一旦離す。そうしてその目を見詰めながら言う。その黒い神秘的な瞳を。

「わかってるよね」

「ええ、勿論よ」

泣いていた。泣きながら笑って答えるのだった。

「僕達も。一緒にね」

「ええ、これから宜しく」

笑顔でヴォルフガングを見上げて言う。年下なのに背は自分よりも大きい。そのせいか頼もしいものさえ感じて言うのだった。

「そしてこれからもずっと」

「うん、ずっとね」

二人はそこまで言い合うとまた抱き合った。開かれた夜の門の後ろは光で照らされていた。それは訪れた自由と幸福を照らす光だった。二人はその光を浴びながら抱き合うのだった。

壁 完

2007・12・6

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、

個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7656d/>

壁

2008年11月7日08時58分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。